

## チャペルでの奨励（二）-与える喜び

**[イエス・キリストの使徒パウロの言葉]** わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与えるほうが幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。

（『新約聖書』「使徒言行録」二〇章三十三-三十五節）

今日のこのひととき、人間とそれを超える大きな力について皆さんと一緒に考える時を持つることに対して、限りない感謝をささげます。

先ほどの朗読にあった文章では、イエス・キリストの使徒であるパウロが、自ら行い、身をもって示してきたことが幾つか記述されています。とくに、勤勉に働くことによって弱い人を助けてきたと述懐しています。そして、それは主イエスが言われたことでもあり、皆さんもそのようにしてほしいと述べて、そうした行動を奨励しています。パウロはここで、イエスが言われた言葉、すなわち「受けるよりは与えるほうが幸いである」という言葉を引用しています。「受けるよりは与えるほうが幸いである」、英語版聖書では “It is more blessed to give than to receive” と表現されています。本日はこの言葉の意味を私なりに考えてみたいと思います。

### 真のパラドックス

この一節は、何と明快で力強く胸に響く言葉でしょうか。「受けること（もらうこと）」と「与えること（あげること）」を比べ、「与えること（あげること）」の方が幸いである、と述べているのです。常識では、もらうことが幸いだとされるので、イエスのこの言葉は常識と全く逆のことを主張しています。しかも、そうすることが幸いである、つまりそうすることによって恵み (blessing)、すなわちより大きい満足あるいは喜び、ないし幸せが与えられると述べているのです。与えることによって、より良いものが返ってくるという主張です。

このような考え方は、実はイエス以外にも古今東西の多くの賢人たちが色々な表現によって残しています。例えば、中国の紀元前五世紀頃の思想家、老子は「人に与えて、己いよいよ多し」と述べています。また、中世イタリアにおける最も著名な聖人であるアッシジの聖フランシスは「我々は与えることにおいてこそ受け取ることができる」という簡潔な祈りの

言葉でイエスの言葉を継承しています。

時代をさらに下ると、偉大な英国人とされるイギリスの元首相ウィンストン・チャーチルには「人は得ることで生活(living)を営むことができるが、人に与えることで真の人生(life)を生きることができる」との名言があります。またミッキー・マウスやのディズニー・ランドの生みの親であるウォルト・ディズニーは「与えることは最高の喜びである。他人に喜びを運ぶ人はそれによって自分自身の喜びと満足を得る」という言葉を残しています。

これらはいずれもよく知られた海外の名言です (successinspired.com 2009) が、日本においても同様な格言があります。私は最近、江戸時代の農政家・思想家である二宮尊徳のある書物を読んでいたとき「奪うに益なく譲るに益あり」(二宮一九三三、五十一ページ) という言葉を発見しました。このことから考えると、同様の意味をもつ箴言は、単に思想家や哲学者によって述べられているだけでなく、それ以外の分野で社会を先導した多くの賢人によっても古今東西を問わず営々と伝えられてきた智慧である、ということが出来ます。このことを最近改めて知った次第です。

## 与えるもの、受け取るもの

では、これらの箴言で「与える」という場合、何を与えることを意味しているのでしょうか。また、その行動によって「受ける」ものが必ずしも明示されていないにもかかわらず、一体なぜ「幸い」とされるのでしょうか。

まず、自分が第三者に与えるものとしては、物品や金銭が思い当たりますが、それらに限られません。第三者のために自分の時間を割いてあげること、手を差し伸べてあげること、その人が言いたいことを聞いてあげること、やさしい言葉をかけてあげること、あるいはその人に関心をよせてあげることなど、幅広い行動が含まれると思います。つまり、本来自分所有しているモノやおかね、あるいは時間や体力を第三者に与えることであり、自分自身の一部を何らかのかたちで他の人に分け与えることに他なりません(布施心、贈与の精神、あるいは利他主義)。そして、それらを与える対象は、個人の場合もあれば、特定の組織あるいは社会一般に対する場合もあるでしょう。

ところで、その見返りに受け取ることになることが明示されていないにもかかわらず「幸いである」とされるのはなぜでしょうか。これが最も重要な点であり、イエスの言葉をはじめとする箴言の持つ偉大さと意味の深さだと私は思います。経済取引の場合は、与えることに対する見返りが当然想定されるわけですが、ここで考えている自分自身の一部を与えるという場合は経済取引ではありませんから、本来的に見返りは何も想定されていません。しかし、そのほうが幸いである、と主張されているのです。

この場合、幸いであるとされるのは、明らかに物品や金銭を受け取ることによるのではな

く、全く次元を異にする何かをもたらされるからです。それは、結局、何らかの幸いな恵み (blessing) であり、「ほんとうの喜び」であると表現することができると思います。換言すれば、幸福感、精神上的の充実感、あるいは深い喜びであり、真の報酬といってよいかも知れません。あるいは、心の穏やかさであり、誰によっても奪われることのない喜びであり、場合によっては「この上ない魂の歓び」という表現がなされています。これがイエスのいう「幸いである」(blessed) ということの意味だと思います。

先ほどアッシジの聖フランシスの言葉「我々は与えることにおいてこそ受け取ることができる」を引用しましたが、これを明示的に表現するならば「我々は与えることにおいてこそ『本当のよろこびを』受け取ることができる」という風に理解できましょう。これこそが本日取り上げている多くの箴言の核心であり、また時を超えた真理だと思います。

### 人間としての深化ないし成長の三段階

以上のことを私は、初めから全部知っていたかのごとくお話ししました。しかし、決してそうではありません。長年の経験や考察を経てようやく分かってきたというのが実情です。つまり、このことに関しても「人間は色々な面で次第に成長できるものだ」というのが私の経験でありそれに基づく実感です。

一般に、人間の成長には三つの側面があります。第一の側面は「肉体的な成長」です。生まれてから年月を重ねることによって身長や体重が増えてゆくことです。第二は「知的な成長」です。勉強や経験を重ねることによって知識や知恵が増えるとともに、判断力も高まってゆくことです。そして第三は「霊的な成長」です。これは、何を本当のよろこびや幸せと感じるか、という観点からみた場合の意識の変化といえます。これは人間としての深化ないし成長であり、もっとも究極的な意味での成長ではないでしょうか。

そして、この面での成長にもまた三つの段階が区別され、幸せの感じ方は段階的に深まってゆくものだ、という捉え方があることを私は最近、ある書物（高橋 二〇〇八、百十七ページ）の著者から直接教わりました。すなわち当初は「もらう幸せ」、その次は「できる幸せ」、そして「あげる幸せ」へと次第に深まるという見方です。

第一に「もらう幸せ」があるのは、人間が生存する必要がある以上、まず自己中心の考え方に立たざるをえないからです。それが満たされると、次には自発的、能動的に何か「できること」に幸せを感じるという段階があります。そして最後の段階として、「与えること」による喜びを含むほんとうの喜びがある、という理解です。

この第三の段階では、与えることによって喜びがもたらされるだけでなく、その逆の場合、すなわち第三者から何かをもらう場合、あるいは何かをしてもらう場合にも、謙虚な心と敬意をもって受け止めることができるようになります。つまり何ごとにも常に感謝できるよう

になるわけです。私自身の経験に照らしても、この成長三段階の考え方はたいへん納得がゆくものであり、卓見だと思います。

## 私の経験

私のここ二〇年来の経験を振り返ってみますと、人間の成長にはいま述べた三つの段階があるということを実感しています。

最初のころは、恥ずかしいことですが「担当科目の講義の準備や学生へのアドバイスに時間を割くことはむろん大切だが、本当のところはそれよりも自分の論文を書く時間を確保する方がより重要である」と考え、自分の時間を確保することを優先させていたことを否認しません。また、所属する組織のための各種任務も「やむを得ない仕事」と受け止め、喜んでそれに取り組むという状況ではありませんでした。そして「研究費は色々なところからできるだけたくさんかき集めそれを自分のために使う」という発想でした。つまり、時間は自分のために確保するものであり、お金は自分のために集め使うものである、という考え方を知らず知らずのうちにとっていたわけです。まさに「受け取る幸せ、もらう幸せ」を実践していました。

その後、担当講義をこなすことに自信がつき、学生へのアドバイスも自信をもって行うことができるようになりました。そして組織の任務も経験を積むことによって難なくこなせるようになり、また研究費も各種の資金源から少なからぬ金額を調達することができるようになりました。それに伴い、これらのことについて「できる幸せ」を感じていました。

そうした状況にあったとき、幸いにも多くの方から教えを受ける機会に恵まれ、また自分なりに研鑽を積んだこともあってこの段階から抜け出ることができ、今日に至っているように思います。

この結果、現在では、これまで長年にわたって自分自身が学び、身につけさせてもらった様々なことを学生諸君に教え、伝達する責務 (calling) が自分に与えられていることは、ほんとうにうれしいありがたいことだと思っています。また、学生諸君がいろいろな相談に来るのは、かつてはわずらわしいことだという感じを持って迎えていたことを否認ませんが、いまでは彼らのために時間を割くことをうれしく感じています。そして、ここでいうべきことでないかも知れませんが、様々な理由で私の手元にもたらされているお金を全て私のもので使うのではなく、その一部はゼミナールの学生諸君などの研究発表 (合宿) を支援したり、研究成果を冊子のかたちで残せるように使うのがふさわしいという考え方ができるようになりました。また大学における各種の委員などの任務も「やむを得ない仕事」というよりも、自分に与えられたありがたい責務であるというように理解することができるようになりました。

私自身このような考え方ができるようになったのは、一つには「多く与えられた者は誰でも多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される」(ルカによる福音書、十二章四十八節)という考え方が本当に分かるようになったからだと思います。そして、いま一つには、当初自分に与えられた時間やエネルギーなどを学生や所属組織のために「与えること」が、自分にとってほんとうにうれしいことであると理解できるようになったからです。

学生諸君が一年間で知的にも精神的にも大きく成長する姿をみることは教師にしか体験でない大きな喜びといえます。さる四月、まったく予想外のことでしたが、今年卒業した私のゼミ生が、ゼミを通していかに多くのことを学んだかを述べたていないなメールをくれました。こんなにうれしいことはありません。

## 結論

思えば、明治学院大学のモットーである「Do for others」(他者への貢献)は、福音書(マタイによる福音書、第十二章七節)が述べているとおり、黄金律(ゴールデン・ルール)であり、倫理的に全く正しいことです。そして、それは同時に、他者に対して何かを行う者にとっても本当の喜びがもたらされることを意味しており、このため非常に強固な命題ということができます。黄金律をこの側面にまで言及した書面を私はまだ目にすることがありませんが、今日述べた考え方から導かれることとして、ここで付け加えておきたいと思います。

私にとっては二〇年という年月がかかりましたが、「受けるよりは与えるほうが幸いである」という真理に次第に気づかせてくれた大きな力(Higher Power)に深く感謝しています。

(明治学院大学「チャペルアワー」における奨励の言葉、  
於横浜キャンパス・チャペル、二〇〇九年六月二十五日)

## [引用文献]

高橋佳子(二〇〇八)『十二の菩提心-魂が最高に輝く生き方-』三宝出版。

二宮尊徳(一九三三)『二宮翁夜話(福住正兄筆記)』岩波新書、岩波書店。

successinspired.com(2009), "Law of Giving- Give and You Will Receive."

<<http://www.successinspired.com/?s=Law+of+giving>>